

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

共同利用・共同研究課題「近世イスラーム国家と周辺世界」

(平成 27 年度第 1 回研究会)

日時：平成 27 年 7 月 12 日（日曜日）午後 2 時より 6 時 15 分

場所：AA 研 303 室

共催：科研費基盤 A「イスラーム国家の王権と正統性」

報告 1

近藤 信彰（AA 研所員） 「イスラームにおける王権と正統性ーめざすもの」

本報告では、イスラームと王権と正統性という視点から、新たな研究活動を開始するにあたり、必要な諸問題について論じた。過去 30 年間、実証主義と現地主義に基づいて行われてきたイスラーム史研究は曲がり角を迎えている。研究の精度は飛躍的に向上したが、扱うテーマはより小さくなって、個別研究に特化し、専門分化が進んで、全体像が見えにくくなっている。これまでの研究の進展をより大きなコンテクスト、パラダイムに結び付けるテーマとして「王権と正統性」がふさわしいのではないかと考える。

実際に、従来の国制史を越えるものとして、近年、王権や正統性を扱う個別研究は多く研究レベルも高い。一方で、時にあらゆる事象をこうしたことに結び付けて論じてしまう傾向も見られ、方法論的にも改善の余地がある。この意味で集中的にこのテーマで研究を行うことは、お互いの事例を参照し、批判しあいながら、より大きなパラダイムを生み出すことにつながるであろう。

特に問題となるのは 1258 年にアッバース朝が滅亡したのちの正統性をどのように考えるかである。従来の概説書はカリフとスルタンの並立という後期アッバース朝の体制の延長でとらえるため、限界があった。アッバース朝が滅びると多くの君主がカリフを名乗りはじめたことは、マムルーク朝の例を中心に据えたため、無視されてきたのである。この意味で、オスマン、サファヴィー、ムガルなどの近世帝国を軸にこの問題を検討することはイスラーム史に新たな知見をもたらすことだろう。（近藤信彰）

報告 2

高松 洋一（AA 研所員）

「オスマン朝君主の呼称と称号ーパーディシャー、カリフ、スルタン」

高松報告は、代表的なイスラーム王朝であるオスマン朝の君主に関して、呼称・称号と王権の正統性の問題を扱った。オスマン朝の王権の性格は呼称・称号と深く結びついており、ペルシア的王権を示すパーディシャー、イスラーム的王権を示すスルタンとカリフ、そして、テュルク・モンゴルの王権を示すハーンのいずれもが、オスマン朝の君主に関し

て用いられた。長い王朝の存続期間の間に対外的な正統性はコンテキストに応じて変化し、また、王家の内部での正統性にかかわる王位継承の規定も、17世紀に大きな変化を経験した。その意味で、王権の正統性のあり方は時期によって大きく異なり、歴史的コンテキストを離れて一言で説明することは非常に困難である。

報告の後半は、オスマン朝君主の代表的な称号であると考えられがちな「スルタン」という語についての検討が行われた。トルコ語の一般名詞として「スルタン」という語は、第一義的には a 王女、ついで b 王女以外も含んだ王族女子（母后など）の総称、c 男子を含む王族成員の総称、d クリム・ハン国の王子、e 君主一般、f 発話や文書における君主以外の相手への敬称として用いられ、少なくとも 16 世紀以降においては、オスマン朝の君主自身を指して用いられることは決してない。「スルタン」の称号としての用法について見ても、a. 王族男子の名前の前につけるか、b 王族女子の名前のあと、あるいは c 聖人の名前のあとにつけるのが通例であり、排他的にオスマン朝の君主自身に関して用いられることはない。以上のことから、オスマン朝の君主を指して多義的な「スルタン」という語で呼ぶことは極めて問題が多く、16 世紀以降のオスマン朝の君主に関して言えば、君主を排他的に指すには「パーディシャー」という語が一般名詞として用いられていたことが歴史的事実として指摘できる。

さまざまな文書史料をも駆使しながら、これまで当然と思われてきた問題に切り込む高松報告は、今後の研究のモデルとして極めて有意義であった。現在の研究者の実証能力をもってすれば、これまで等閑視されてきた事象も見直すことができることが示された。

(文責：近藤信彰)